

湖水誕生 下

曾野綾子

湖水誕生 下

曾野綾子

定価二二〇〇円

湖水誕生 下

昭和六十年十一月二十日初版発行
昭和六十年十二月十日再版発行

著 者 曾野綾子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104東京都中央区京橋二ノハノ七

振替東京二一三四

©一九八五

検印廃止

ISBN4-12-001437-1

湖水誕生
(下) 目次

第十七章 岩の乳首

第十八章 地の声

第十九章 形見の二月堂

第二十章 「秘めたる恋」

第二十一章 「地底旅行」

第二十二章 ティートン・ダム決潰

第二十三章 時の証人

第二十四章 花は花

第二十五章 肌合わせ

5

22

39

56

73

90

107

125

142

第二十六章	雪を聞く窓	160
第二十七章	八〇万台目のダンブ	177
第二十八章	静寂の夜	193
第二十九章	そよがない木	210
第三十章	運命を呑む川	227
第三十一章	沈む十字架	245
第三十二章	光の道	263
あとがき		283

湖水誕生

(下)

第十七章 岩の乳首

昭和四十九年、高瀬の谷にはやたらに雨が降った。

六月二十九日から七月二十日まで、実に三週間以上もほぼ毎日のように降り続いたのである。

一建所長の堤資明はこれ以上素朴な感情はないと思いつながら、これだけ降るとつい、「穴の中」で地下発電所の仕事をしている二建が羨ましい気がして来るのであった。一建の管轄する高瀬ダムは、今最盛期に入っている。最盛期というのは工事にもっとも多数の人間が投入され、出来高が目に見えて顕著であるという時期である。ダムの場合それは堤体がみるみる積まれて高くなつて行く期間をさすのである。

現場における最盛期という言葉は、世間の人が考えるような通俗的なものとは全く違ひ、情熱にまみれた快い響きを持っていた。それは権勢とも無縁のもので、しいて言えば、サッカーの試合の最中とか、登山の山頂を極める直前とかの気分ではないかと堤は思う。あるいはオペラの大合唱のような濃密な高揚した気分である。それは、総てのものが完全に動いているという意味において、一つの機能美なのであった。

それが、今年は泥まみれであった。現実にも雨量は多すぎたし、オイル・ショックによる景気の後退によって、工事全体を遅らせるのではないかとという憶測も決して根拠のないものではなかった。

このしつこい長雨のために高瀬ダムは止水壁の役目をするコア（核）と呼ばれる中心の部分の盛立てを中止せざるを得なくなっている。というのは、高瀬ダムでは、大学の教授たちを中心メンバーにした、堤体材料分科会と呼ばれるグループの意見を聞いて工事を進めて来ていたが、その中の数人の意見によれば、コア部分の雨天の盛立てはコア材の含水比を大きくし、そのような状態で転圧と呼ばれるローラーによる締め固めを行うと、ウェービングを起こすと言われていたのである。ウェービングというのは、一三トンの震動ローラーをかける時、ローラー部分が波うつようになることによって力の不均等が土の表面に波状の凸凹を残すことであったが、堤は内心、そういう危惧は高瀬の堤体材料を本当に知らない頭の古い人たちが昔ながらの学説に捕われているからだと思っていた。

一昔前までコア材に使っていたのは、含水比が六〇パーセントも八〇パーセントもある粘土が普通だった。だから転圧を行うのは天気の良い日に含水比を三〇パーセント台に落してからするのがいいと言われていたのである。

しかし高瀬のコア材は、泥流堆積層からとった砂質系のもので、自然含水比は僅か六パーセント前後なのである。実際の締め固めに都合のいいのは、九パーセントくらいの含水比だというから、高瀬では、コア材の採取場の近くにわざわざ撒水装置を設けて、ダンブに積み込まれるコア材にシャワーを浴びせかけて、湿らせるようにしていたくらいなのである。雨が降れば、自然含

水比は九パーセントから一〇パーセントになるから、むしろ雨の日の作業のほうが理にかなっていると思うのだが、学者先生のご意見は、雨量が多い時に施工中のコア部分の表面を平らにする余裕のない時は、シートをかけて保護しろというのである。

それでも、今ではダム为天端と呼ばれる平面が、もともとの川の流れの高さとはほぼ同じくらいになって来たから、まだしも扱いは楽になって来た。一旦河底まで堆積した土砂を掘削して再び土質を選んで人工的に積み直すのだから、初めのころ、ダムの天端は長い間谷の底にあった。するとそこに溜る水の捌け口を考えてやらなければならなかった。排水溝を作ったり、ひどい時には、排水ポンプで水を汲み出していた時期もあったのである。

ダムに積むための土は、五箇所の採取場から山の表土を削いで採る。天気さえよくなってくれば、大の男の背丈よりも直径の大きいタイヤをはめた巨大な三二トン・ダンプが、唸りをあげながら、ひきもきらずに、決められたルートを土を運ぶために往復した。初めは地球の窪みに落ち込んだ児童公園ほどの大きさしか見せなかった天端は、次第に高さを増すとともにその面積も拡がり、ちょっとした運動場のようになり、今ではヘリポートか野球場ほどの広さになって来ていた。

しかしその広大な天端の上には、ほとんど人気というものがなかった。黄色と黒のんだんらの安全チョッキを着た男が一人、ひきもきらずに入って来るダンプの誘導をするために、ゆっくりと動いている様子は遠くからでも見えたが、ダムというものには大勢の人間がとりついて熱気を帯びて作るものだという映画が作りだした印象を今でも持っている人は、この閑散とした場面に驚くのであった。しかしそれは、重機と人間をできるだけ同一空間で接触させないことが安全の

基本だという原則に基づいたもので、それは決してこの現場だけでなく、高速道路にも、飛行場にも、鉄道にも、生産工場にも、どこにでも近年は貫かれているごく一般的な常識に従っているだけのことであった。

とにかく、来る日も来る日も、土を運んで川幅の狭まった所に盛り上げ、流れを堰き止めて水を溜める。それがダム作りの原理である。ただその土の量も質もが、素人が考えているほど単純ではないということだった。

作並では、盛立てが最盛期に入る前から、土の管理のことで何度も東発とぶつかっていた。現場スベック（工事施工基準）によると、コア部分は二〇〇ミリ以下でしかも全体の一三パーセントは〇・〇七四ミリという細かさの土でなければいけないという。材料を採るためのコア山は木がよく茂っていて山としては老いていた。山というものは、実に予測のつかないもので、外側の見場はよくても「芯のほうがザラメになっている」という山もないではないし、いい土を予想通り確保できるという幸運はまずないのである。

どうしてコアにはこれほどの厳密さが要求されるかというと、それは不透水性が必要だからであった。ダムは部分によって水を通していい箇所とそうでないところが計算されており、下流に面した外側の最も透水性を許容される所の透水指数を一とすると、不透水性を要求されるコア部分はその一万分の一しか許されないという厳しさになる。

作並では、ダンプに積み込む時に細粒分とやや粗粒分とを混ぜ、これを「いいとこどり一ばいに、ザラメ一ばい半」という感じでやっていたのだが、それはもちろんスベックに合う範囲以内であったし、毎日毎日、山を崩してそこから規格に合う部分をブレンドしていくのだから、これ

以上やりようはなかった。

東発はダム为天端の上に、若い大学出の管理者を交替でにおいて、作並の運び込むコア材を監視していたが、材料が規格に合う合わないでもめることは始終であつた。「この山のものはだめだね」などと言われると、「この山から採れと言つたのは、そっちなんですよ」ということになる。クレームのつけ方にも、一定の基準はなくて、管理者の「個性」によって判定の基準が違ふことが施工側としてはやりきれなくなつてくるのである。

状況が紛糾すると土の部分をとつてテストに廻すということになるのだが、その間、数十台のダンプは止まり、大学出は事務所へ引き揚げてしまふ。

第一ばいの土の質を正確にするのではない。毎日毎日、延々とアリの行列のように続く巨大な三二トン・ダンプが、日に三万立方メートルも動かす土の質を、その部分によつて均一にしろと言われても、可能な厳密さには限度がある。問題はしばしばこの天端の上の若者からさらに上層部まで拡がった。東発がここ数日間に入れたコアを全面剥ぎ取つてやりなおせと命令して来る時もある、作並の現場は色をなしたのである。

「冗談じゃないよ」

コアはまだこれから一〇〇万立方メートル以上も積み重ねばならないのである。こんな状態ではとても今後やっていけるものではないという限界を作並の関係者は感じ始めていた。こういう場合の現場の憤懣は複雑で決して単一ではなかつた。施主がいつも威張っていると感じる不愉快さは、表には出さなくても常にぬきがたい先入観である。第一、技術的に言つて、どうしたらスベツク通りの材料の厳密さを確保できるかと言ふとそれが不可能だから、腹立たしさはそのような

システムを容認している作並の所長にも向けられることになる。

作並では、ショベルのきく限り一〇メートル程のコアを剝ぎ取って、そこに粗密交互に層状に土を入れなおしたが、この手間の問題は実は初めからわかっていたことだと所長の海津文吾は考えていた。海津は仕事にかかる前から、材料を採取した山から直送することは不可能だと考えていたのであった。コーヒーのブレンドだって、最初にそれぞれの豆をプールしておくから思い通りに混ぜられるのである。東発は採取―積込―運送―現場で均し、という工程を考えていたようだが、それは海津の希望する、採取―運送―粒度別仮置―積込―運送―現場というシステムと比べると、運送の距離の差は考えないとしても、積込の手間が確実に一回増えることになり、東発はそのやり方をとらなかつたのであった。

海津にとってこの問題は、技術的には、解決策を何日も考えねばならないような複雑なものではなかつた。ただ作並側にとって失敗だったのは、契約の時に、この仮置の問題を言い張らなかつたということなのだが、それもあの当時、あらゆる所で予算を叩き切っていたという途中経過を知っている者から考えると、最初からそれを押し通せなかつた経緯に或る種の諦めのようなものを持たないでもなかつた。

海津は東発に対してコア材一〇〇万立方メートルの仮置をすることを申し入れていた。「東発さんの方でそれを認めてくれないと、質の保証はできません。積込が二度になることによって（二立方メートル当り）余分にかかる三十円や五十円はどうでもいいです」と堤一建所長に言い行っていたのである。

現場が一目に見渡せる兩岸の見張所から見ると、人間が米粒ほどに見える広い天端には、人影

というものはほとんどなかったが、ダムを取付部といわれる兩岸との接点には、晴れた日には数十人の労務者がしゃがみ込んで何かやっていることがあった。もっとも天端が上がって行くと共に兩岸の表土を削ぎ、あとをきれいに清掃するという仕事をしている人たちの仕事の場所も徐々に上がって行つて、彼等の軽業師のような命綱頼りの危険な作業のほうに目をとられていると、その崖の足許にしゃがみ込んでいる労務者たちはかなりの数がいても岩に溶け込んだように目立たない存在であった。

彼等が今どき珍しいなにか手の作業をしているらしいということは感じられても、彼等が実際にしている仕事を当てられる人は皆無に近かった。

この作業員たちは、トビでも大工でもなく、ハッパやアセチレンや熔接の免許を持っているというわけでもなかった。彼等はその広大な岩の足許に坐り込んで、バケツの中に入れた泥の塊を大きめの炭団^{たん}ほどの大きさにこね、それを岩の小さな割れ目に手ですり込んでいた。この巨大なダムの堤体の強度を確保するためには、それが兩岸に取りつく部分の処理もまた、小心といわれるほどの厳密さで行われねばならないからであった。

堤体の着岩部の岩の面は決して平らな面ではない。それは岩から表土を削いだだけの粗削りの面である。堤体の土は当然その部分にも丁寧に置かれて転圧されるのだが、岩の細かい亀裂の間まで完全に充填されるかどうかが問題なのであった。普通こういう箇所はそれ専用のタンパーで叩いて土を充填しているのだが、ここでは、部分的にそれをもっときめ細かい手仕事でやっているのだった。

もしこの手の亀裂にきちんと土が入っていないと、ダムの上流から染み通って来る水は、この

亀裂をみずみちにして、次第に大きな流れを作るようになる。それはとりもなおさず堤体を兩岸に堅固にくっつけている状態を破壊することになる。

作業員たちはこの仕事を「まんじゅう貼り」と呼んでいた。まんじゅうのように水で練って固めた風化花崗岩の土を、一日中、岩の割れ目になすりつけて亀裂をつぶしている。その割れ目は決して大きなものばかりではなかった。幅一センチ、深さ一センチでいどの浅い亀裂でも、彼等は丹念にまんじゅうを貼っていったのである。

気を減入らせるような雨であった。時間あたりの雨量が一ミリ以上になったら、コア部の盛立てはいけない、三ミリになったら外側のシェル部もだめという規則がある。そんな規則がなくなつて、三ミリ以上の降りになれば、運搬道路は泥と水で穴だらけになり、三二トン・ダンプでさえ痛々しくて走らせられないような気になる。事実、雨のひどい日には必ず二、三台が故障してよろよろと入って来る。働くのをやめた方が得な日だなあ、と海津は事務所の窓から外を見ながら思うのであった。

しかし少なくとも、今うちにいるよりは現場で雨にたたられてゐる方がいい、と海津は時々自分に言い聞かせた。この暗澹とした景色の中にも、救われる話もある。ダンプがフル回転し始めると同時に、作並のモーター・プールも戦争のような忙しさになったのだが、青木の妹は、関東タイヤから出向してそこで働いている男とやはり結婚して、大変うまく行っている、という話を聞いたからである。結婚する前は、あまり気がすまなくて、何度やめようと思ったか知れない、という。それが周囲への「気兼ね」からまぎわになつて婚約を解消する、という決断もつかないまま結婚した。夫は、現場へ着くと、すぐ作業服に着換え、帰りは入浴してからまた通勤着に着換

えて帰って来る筈であつた。

それなのに、彼女がよく洗った夫のYシャツにアイロンをかけると、どうしてもゴムのこげる匂いがする。それだけ通勤着と作業衣を着分けていても、夫の首にしみこんだゴムの匂いがYシャツにしみこむのだと感じた時、若い妻は、夫に惹かれたのである。いい話だと思う。

しかし海津自身の生活はめためたであつた。脚を骨折した母は三カ月ほどの入院で帰って来たのだが、七十六で、すっかりおいぼれてしまつたのである。

老化ということを、海津はまだよくわからないつもりでいた。事務所の若い連中は海津のことを「ご老体」とか「所長も年ですから大切にしてください」などと言っているから、二十代、三十代から見れば老人なのだろうが、海津はまだ、何十段もの階段を煙草を吸いながら上つても息も切れなかつた。

海津の母も、海津が妻を死なせてからは、孫娘たちを育てるために、主婦の座に戻つた。それがよかつたのだと海津は思つていたし、脚を折るまでは、まだ立派に現役だつたのだ。それが一度世話をされる身になると、母は急に、そのような立場のほうが楽だと思ひ始めたやうである。母はリハビリテーションの厳しさをいやがった。手洗いへはなんとか一人で行くし、昼間、自分の食べるものだけは何とか作るが、自分の食べた茶碗を洗うということもせず、流しにほうり出してあるといつて、娘たちは愚痴を書いて来る。

母の性格を知っている海津には考えられないことであつた。昔は、もう今日は寝て、片づけは明日朝にしたらどうですかと言っても、汚した皿をほうり出したまま寝たりすることはできない性格だつたのである。

老花とは自己保存の情熱だけが残ることらしい、と海津は思うようになりかけている。そのようにしてあの母も自分を守らねばならない時期に來たのだから、それが当然と思えばいいのだが、海津は今、自分が東京にいらなくて済むことは本当に救いだだったと考えずにはいられなかった。十八と十六の娘たちは時々祖母に関する文句は言つて来るが、海津に帰つて来てくれとは言わない。それがいじらしくもあり、亡き妻の残していった教育かと思う時もある。もし自分が今、毎日母を見て暮さねばならなかったら、昔のきびきびした母を見馴れている自分は随分苛々し、母が生きながら別人に変質したことに、劣るよりは腹を立てるのではないかと思う。

泥まみれの梅雨が明けるまで海津はそのように考えることで、自分の氣持を救つていた。

六郷純一郎のいる東筈二建の所長室にはその春から一枚の色紙がかけられていた。

「白樺の芽吹きいづる五月晴　　蒼夢」

作者は六郷ではない。六郷は俳句など詠まない。だからこの俳句が、芸術的にいいものなのかどうかよくわからないのだが、とにかく素朴な感じが出ていると思うのである。

五月の高瀬溪谷は人々の苦勞など、何一つ存在していないかのようなはなやかさである。あらゆる芽が複雑な緑の色を増し、花が一斉に咲き揃う。地底で働く人々は一日、事務所前の空き地で雄大な対岸の眺めを毎年この頃に行われるジシギスカン鍋のパーティの席で味わったのであった。その時、二建の俳句同好会のメンバーでもある庶務の次長が作ったものである。

俳句としてよからうが悪からうが、そこには、二建の人間にしかわからない感動があると六郷は思う。それで彼は、恥ずかしがる次長にむりやりに色紙を書かせて、所長室に飾ることにした。